
“かみさま”と“人間”の日常

蒼螺@ネタよ何処へ…

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

”かみさま”と”人間”の日常

【Nコード】

N9248Z

【作者名】

蒼螺@ネタよ何処へ：

【あらすじ】

”かみさま”と、かみさまに気に入られてしまった”人間”が異常ながらも日常を送っていく。

プロローグ

地球でも宇宙でもない、どこか遙か彼方に”かみさま”は存在した。
それは天国でも地獄でもない。
そんなところに”かみさま”はいた。

十十十

この宇宙で私以上の権力者はいない。
あの有名なキリストすら私の配下。
人は皆私の子。私の紡いだ運命で生まれた。
運命の三女神と言われるモイライも私が作った。
でも私にも分からないことがある。

人の心。

人間の心だけは、今一度分かり得た試しがない。
私の努力が足りないのか？
人間が気まぐれすぎるのか？
私の願いは叶わない。
人間の心を動かすのも私の役目じゃない。
私はただ気まぐれに宇宙を作って、惑星を作って、その中で特別な星を作って、そこで私以外の神を作って、私は人間を少し作って、気まぐれに人間を滅亡させて…でも伏羲ふつぎと女じよか？が生き残って、そこからまた人類は新しい形でできて…。
私にも仕事が増えてきて、一人では厳しいから神を沢山作って。
一人一人に役割を与えて来て…いつの間にか私の仕事は…
確か、人の生死と神々の運命を操る事だけになって。

一日は人を産んで殺して産んで。その繰り返し。
人の気持ちを読むなんて、神の私が出来ないんだから誰もできないはず。

時々思う。私が神で良かったのかって。

それでも人間は私に感謝しなければならぬ。

私が産んだから、私は運命を動かすから。

中でも、あの子には感謝されたい。そのために尽しているから。

私はこんな事を時々思う。

自分の作った世界で悩むなんて、阿呆らしいけど。

——いっそ人間になってあの子の元に飛び込もうか——

ああ、駄目だ。それじゃあ人間どもの高みの見物が出来ない。

”かみさま”であるまま、人間の世界に行ってしまう方がいいのか？
でも、神の代わりは：

「上等。」

決めた。

仕事は全部他の神にでも任せても問題ないだろうし。

短期留学感覚で行っても問題ないでしょ。十年はいるつもりだけど。

まあ、短いものか。

決まれば行けばいい。

『決断は遅かれ、実行は神速なり。』って誰かが言ってたし。

私の世界なんだから、私の自由にしても良いよね！

「行ってきました！」

誰もいない場所に向けてそう言って、私は地上に降りた。

十十十

1460年代。

世界のどこかにある村。

かみさまはその村の事などすっかり忘れていた。

服装などは回りを見て変えれば、それでいい。

まずはお気に入りの”あの子”の様子を見る。

”あの子”——リーベラ・ドウルクスは一般の農家の娘だ。

村人たちとは家の手伝いや大学を通じて交流がある。

気立ての良い謙虚な娘。

そんなリーベラを第一に気に入ったのがかみさまだった。

かみさまはリーベラを鼻屑しまくり、せめて不自由のない生活を送る運命を轢いていた。

リーベラ自身もこれからを心配しながら幸せを実感していた。

そんなリーベラに、転機が訪れた。

カミラ・アーレルスマイヤー…もとい、”かみさま”との出会いだった。

リーベラの人生は、かみさまとの出会いで今迄以上に妙な人生を送って行く——

そんな物語。

プロローグ（後書き）

矛盾とかあってもかみさまの力で拭ってみよう。
いや感想の悪い点でお知らせください。なんとか直します。
よろしく願います。

E p i s o d e ? ..ある日（前書き）

今回はリーベラ視点からです。

「＋＋＋」があればそこから視点変わります。

大体分かるといいんですが：

殆どかみさまとリーベラとナレーさんです。

あ、ナレーさんについては銀魂をご参照ください（

Episode?..ある日

カミラ・アーレルスマイヤー。

ある日、突然と言う訳でもなく、彼女は私の前に現れた。

近所に越してきた、とは言うものの、私の近所はここ最近何の変化も無かった。

まあ所詮は土地は広くとも人口の少ない村。

少しばかり遠くても、隣りと言うのも普通のこと。

何せ私の家は酪農と畑仕事を両方やってるから、隣りで近くと言うのも難しくなる。

少し遠そうとは言え、カミラとは一緒に大学に通えるかもしれない。明日は休日だ。家を訪ねてみるのも良いかもしれない。

翌日。

「ああ…ええと、家ってどこだっけ…」

たしか大学の方面へ歩けば家があるはず。

私は大学方面へと歩き出した。

あつてれば良いんだけど…。

十十十

今日はリーベラが来る。

どうせカミラが轢いた運命。

それでもとても楽しみだった。

カミラはさつさとリーベラの好きなお菓子を用意して待っていた。

——コンコン。

ノックする音が聞こえたと同時に、カミラはすぐさまドアの方へ行
った。

「リー：あ、はいどちら様!？」

「わっ!」

「あ、ごめん」

「う、ううん」

勢いがありすぎて吃驚させたようだ。カミラはなんだか申し訳なく
感じた。

「それにしても、家、ここで合ってて良かった。」

「え？」

ああ、そうか。リーベラにはまだ家を紹介したことは無かったつけ
と、少し自分の早とちりな性質を反省してみる。

「突然来てごめんね。家が近所だって聞いたから…」

「いいのよ! 存分にオッケー。さ、上がって上がって。」

「あ、おじゃまします」

そう言ってリーベラは遠慮がちに家の中に入った。

カミラの家はどこにでもある様な外装に、ありふれた内装と家具、
ところどころ目に入る少し高そうな小物があるようなだけの一般的
な家だった。

内情に口を出せば、少し変わったモノ。

親も兄弟も祖父母もいない一人暮らしにしては大きすぎる家。

まず大学生とはいえ、大学が近いから家族のいない家は珍しく感じ
た。

そして何より目につくのがここらでは見かけることのない天文時計。
それは周囲を空気を圧倒するように存在していた。

「カミラ、」

「ん、何？」

「これ、変わった時計だね。私初めて見た…」

「あー…えっと、それはアジアから取り寄せたんだ。なんかかっこよくって…」

「アジアかあ…私にとっては夢みたいなお土地だよ。一回でいいから行ってみたいなあ…」

カミラはそんな最後の呟きを聞き逃さなかった。頭の中で何度もその言葉を唱える。

「じゃあ、今度行ってみようよ。」

「ええっ！？ムリだよ、遠いもの」

「大丈夫、私が連れてってあげる。」

「船が無いでしょ？」

「私の知り合いにそういう関係の人がいるから」

「うー…でもなあ」

「私がいいんだからいいでしょ！リーベラは遠慮しすぎなの。」

「そうかなあ」

そんな他愛なく見えて、ちょっとした約束事を覚えているのがカミラだった。いつか必ず、と、頭に叩き付けるように覚える。

「はい」

カミラは客人用のテーブルにザッハトルテと紅茶を差し出した。

「あ、ありがとう。」

そう言うなりリーベラとカミラはザッハトルテにフォークを刺す。

「私、ザッハトルテ好きなんだ。」

”かみさま”であるが故、カミラにとっては知ってるのも当たり前前だった。

それでも、さも知らないふりをして、

「そうなんだ！私も好きなんだ」

と言う。

カミラにとっては、リーベラが全てと同然、リーベラに合わせるのもごく普通の事。

「なんか、気合うね。」
当たり前のようにカミラは笑って見せた。

そんなお茶会の後、リーベラはカミラに案内したいところがある、
と言って村の外れに行った。

こんな郊外に何があるのかと思いつつ、カミラはリーベラに付いて
行った。

その場所は、折角の自然を無視するように存在した。
神に祈りを捧げる為の、大聖堂。

リーベラは毎日この大聖堂で身の回りの平凡を祈っているという。
いくら神といえど、心の声は聞こえないカミラにはその声は届かな
かったが、何となく空気で伝わるような願いだった。

「カミラも、ここで毎日お祈りするといいよ。神様は願いを聞き入
れてくれるよ!」

自分に祈るというのもなんだか変な感じがするが、カミラは言われ
た通りにしようと思い、

「じゃあ、どうせ家も近いんだし、一緒に行こう」
そういうことが得策だった。

「うん。じゃあ毎日迎えに行くよ!」

カミラは人間のふりをして彼女に存在を認識される嬉しさと共に、
彼女に『嘘をついている』という後ろめたさもあった。

そして何より気になるのが、地上に降りてからの不思議な殺気。
どこからともなく感じるそれに不穏を感じて過ごしていた。

そして、地上に降りてから一週間が経とうとしたその日に、殺気の
正体が現れるのだった。

E p i s o d e ? ..ある日（後書き）

中途半端に終わったのはわざとなんだからねっ

次回に続く！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9248z/>

“かみさま”と“人間”の日常

2012年1月3日20時47分発行